

21世紀学会誌

第3巻

1996年4月

巻頭言

共同研究

環境保全とふるさとづくり	庄司富美子	1
高齢化社会における福祉社会づくりへの課題	小寺 清孝	11
高齢化社会における企業・官公庁・団体OB会のあたらしい使命	服部弥太郎	18

投稿論文

くらしと洗剤	庄司富美子	31
「地域学」の時代	千葉 俊壹	39

声の欄

高速道路雑感	大川 孝美	47
21世紀への健康学習・体力作りは(新)予知・予防法で	森口 春夫	47
雑感	松本 尚女	47
研究発表大会に参加して	濱口 和則	48
見学会に参加して	瀬戸 聖三	48
都市地震災害国際シンポジウムに参加して	八木 宏	48

書籍紹介		49
------------	--	----

会員アンケート調査の結果について		51
------------------------	--	----

21世紀学会

巻頭言 震災一周年の雑感 - 「宮水」と震災

渡辺 泰堂

震災から一年、破壊された家並みや店舗はつぎつぎと更地になり、町はかつてここにはどんな建物があったのかさえ思い出せない程の変貌ぶりである。知人、友人は去り、定年まで一年を残して退職した筆者の友人などは、資力もなく気力も失せた、もう戻ってこないという。震災は免れたものの、客足が途絶えて潰れた店もある。焼け爛れた遺体を自分と見間違えられて学生の死亡欄に登録されていました、と報告にきた下宿生のうれしい話もありましたが、悲しいことはまだまだ続きそうです。

話が飛んで恐縮ですが、この正月にご自身も被災されました西宮の友人と酒を酌み交わしながら、灘五郷はどうなるのだろうか、といった話をしておりました折、13年ほど前、当時日本学士院賞を受賞されました関西学院大学の柚木学先生（現学長）から頂いた「酒の町西宮」（社団法人 西宮青年会議所発行）という本のことを思い出したのです。

内容は、江戸後期に始まる近世西宮酒造の発展の歴史ですが、その中で特に興味を引いたのが、当時西宮高校の教頭をされていた済川要先生が書かれた“宮水について”の一文でした。津門の入り海とよばれる約5000年前（縄文海進時）の推定海岸線は阪急神戸線まで達していたそうですが、先生はその史実を基に宮水帯水層のでき方について研究し、井水位と水質についても気象学的に調査され、素人にもわかるように図で詳しく説明しておられます。

先生はまたこれからの調査研究中のエピソードも披露なさっている。例えば、「明治時代を通じて、国家予算の総税収のうち三割近くは酒税であった。…軍需予算と酒税とが同額であったので、わたらの税金で日清・日露の両役に勝てた、と灘五郷の人は得意顔だった」とか、「宮水の濁水が冬季に集中し火災のときなど民家に迷惑をかけてはと、宮水を使用している辰馬・八馬の両家が大正12年、当時としては全国に珍しい上水道（水源地・配管）を西宮に寄贈した。当時の町の全予算と同額であった」といったものである。そして締め括りとして、宮水と私と題し、つぎのように述べておられます。

「過去の歴史を振り返るとき、表六甲では浅い良い水（井戸水）を求めて人々が集まり、おもに海辺に住みつき、そこにささやかな生活が始まった。そして小さな集落は西宮町に発展していった。ところが上水道が完備すると、この数十年間に住居が山手に移り、かつてあれほど大切にされた井戸は顧みられなくなった。しかし、ひとたび大地震でもあれば、忽ちわれわれは水なしの生活を余儀なくされる。停電はもちろんのこと、水道管は断ち切れ、まず市民は水を求めてさまようだろう。しかし、『流れる水は生きている』というが、地下防災用貯水池と違って、常に雑持管理された浅い宮水井戸群は、濁水すればそのまま飲用できる。いつの日か数十万人の市民の命を助けることになることを信じているものである。」

宮水をこよなく愛してこられた先生のこの言葉を、友人と何度も読み返しながら、震災直後、リュックを背負い、水の入ったポリタンクを両手に下げて、西宮北口駅を降り立っている人々の光景を思い出していました。